
召喚→田舎娘

さや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚↓田舎娘

【Nコード】

N5692S

【作者名】

さや

【あらすじ】

ド田舎の村娘チエルシーが野菜の収穫中にいきなり召喚された。混乱する彼女の目の前に現れたのはこの世のものとは思えないほど美形の……………魔王陛下！？

彼女はようやく実った野菜の収穫をしている最中、唐突に眩しい光に包まれた。

反射的に目を閉じれば謎の浮遊感に襲われて、絶賛大混乱中の村娘チエルシー（16）。

「どえええ！ なっ、何だべ！ 何だべえー！？
て、て、天変地異でも起こっちゃう！？」

そんな彼女を冷静に見つめる男が二人。

「…これは。何ともド田舎のチンクシャ娘が召喚されたものですね。」

「君ねえ。女性をそういう風に言うもんじゃないよ。
それに、この娘なかなか愛嬌があって可愛いじゃないか。」

彼らは混乱の渦の中にいるチエルシーを余所に二人だけで会話を進める。

「て、へええ！？ こじこじのすか！？ わだし、畑にいだはずなんに
！」

目を開けてみれば、見た事も無いような美麗な装飾が施された信じられない程広い部屋。

さらに混乱を深めつつ、チエルシーはその豪華絢爛な部屋を見回し…固まった。

「私には判りかねます。」

「そう？とにかく、僕は気に入ったよ。予定通り宜しくね。」

「かしこまりました。」

「……………ん？急に静かになったね。」

ふと見ると、チエルシーがこぼれそうなほど目を見開いて男二人を凝視していた。

己に注目が集まったことで再び思考が動き出したチエルシーはじわりと涙目になりながら、つぶやくように言葉を発した。

「わ、わだし…。死んじまったんだべか。」

きょとんとした顔で男二人は顔を見合わせた後、再びチエルシーを見た。

「どうしてそう思ったのかな？」

問われて、緊張しながらもチエルシーは口を開く。

「へ、へえ。あの、わだしはお二方のように綺麗な人間はまんず見た事ねえのすけ。

し、したらそりゃあ神様がその身使い様かとしが思えね。

あのいぎなりの光も浮いだ感覚もはあ死んで天に召されだと思えば何ちおかしくねっちば。

んだら…。」

「うゝん、成程ねゝ。でも、君は死んでないよ。」

「へ？」

「順を追って説明しようか。」

曰く、ここは北の魔大陸にある王城の一室で、彼らは魔王陛下と宰相様。

その魔王陛下の妃を決めるべく古くから続く形式にのっとりて選定の儀を行ったところ、チエルシーが召喚されたということだった。

（じよつ、冗談でねえ！

北の魔大陸つちゅーたら足を踏み入れたが最後まんず生きては帰れねえ地上の地獄つち言われとる場所だべ！？

そん魔王だら、血も涙もない極悪非道の化け物って話じゃっど！

いや、こん人がそうなん、とても見えんっちやが…。

いやいやいや、そうじゃのうても、わだしみだいなしがねえ村娘が月の女神様みでえなべっぴんさんに嫁ぐぞな、恥知らずな真似は出来んがぜよ！

は、はよう断らねば！！！)

「か、か、か、勘弁してける！

どぎゃんしだらわだしみだいな田舎者ら王妃様なん選ばれっちゅうがか！？

わだしはいっちょん美人でん何でんなかつちゃん！？

体型だつでコロコロしてブダみでえだっちえ村ば男だぢにからかわれるぐれえなんに！

そんわだしが魔王様の嫁っこなんなつたら、ええ笑い者だぎゃ！
お願いだけん、村さ帰えしでくれんね！？」

涙を流しながら必死に訴えるチエルシーに困った笑顔を向けて魔王は優しく話しかけた。

「んゝ、ごめんね。僕、もう君に決めちゃったから。

里帰りくらいならいつでも許可するんだけどね…。

それに、心配しなくても大丈夫だよ。

人間の国と違って他国と交流があるわけじゃないから笑い者になんかならないし、

国の者には僕がさせない。」

「…うう。」

超絶美形な魔王に頭を撫でられて、チエルシーは真っ赤になりながら言葉を詰まらせた。

（ず、ずるいのっす！こげんこつされだら何も考えらんねえべさ！）

「あ、そうだ大事な事を忘れてた。」

そう言つて魔王は俯いたチエルシーの顔を覗き込む。

彼女は顔を赤くしたまま意識をどこかへ飛ばしているようだ。

初心な反応を可愛らしく思つてくすりと笑みを漏らした魔王は、その笑顔を張り付けたままチエルシーに呼びかける。

「ね、君。」

頭を撫でていた手をするりと頬に移動させ、指で涙を拭う。

「のえええええー！！」

一気に覚醒したチエルシーが奇声を発しながら、かなりの勢いで壁まで後ずさつた。

「やだな、そんなに怖がらなくても何もしないよ？（今はまだ）」

「やつ、そ、そ、それでねくてー！！」

「んん？まあ、いいや。それよりさ、君の名前を教えて欲しいな。」

あ、僕の事はオルとかオルスって呼んでね。

正式には、オルシディアン・ケイル・エンドウローザ・ヴェスア
ニオ・エン・クオワイオット4世って言うんだけど、無駄に長いか
ら覚えなくていいよ。」

「さ、さよけえ。あ、えっど、わ、わだしん名前なん、ち、チエル
シーだべし。」

「へえ、チエルシーかあ。君にぴったりの可愛い名前だね。」

「と、とんでもねっす！名前負けもいいところで！！」

優しいな雰囲気でありながら何気に押しが強い魔王にずんどこ流
されるチエルシー。

それから数刻後、決意も空しく彼女は魔王の花嫁になることを承
諾させられたのだった。

…だが、彼女は知らない。

その後、魔王と同じだけの寿命を与えられた彼女がその長き生涯
に渡り愛し愛され、結果、百に届くほど多くの子を産み育てる羽目
になるということになる…。

（後書き）

ちよこつと後日談〜平和な日常のとある昼下がり〜

「ほーっ、土地が違うっちゃけんど、結構ええ野菜が出来だでねのはあ昔からこれだけは皆に褒められたもんっちゃ。上手ぐいっで良がつだのす。

後でオル様にも持つでぐべやー。」

全身土まみれ汗まみれになりながらも、ホクホク顔で野菜を収穫するチエルシー。

「ああ、んだども…。宰相様さ、なまら神経質だぎや。

勝手にオル様に食べさせようどすたらまだ怒られっちめえなあ。あん人の前なんわだしでんはあちよっこし気い使うがよ。」

魔王の無駄に甘い采配のおかげで、彼女はのびのびと妃生活を謳歌していた。

そんなチエルシーを執務室の窓から見つめる者が二人。無論、魔王と宰相である。

「ああ、あんなに泥にまみれて…。

陛下が甘やかすからいつまでたっても王妃様の田舎臭さが抜けないではないですか。

嘆かわしい。」

「そこがシーの可愛いところなんじゃないか。彼女はあのままいいんだよ。

それに彼女が来てから皆の笑顔が増えただろう。

僕はとても良い王妃だと思うけど？」

「まあ、城内の雰囲気が多少明るくなったのは認めますがね…。」

「さて、と。仕事もひと段落ついたし、ちょっと彼女を構ってくるよ。」

「陛下、二刻後に会議がございます。どうか、お忘れなきよう。」

「はいはい、分かってるって。それまで邪魔が入らないようによろしくね。」

ひらひらと手を振って、魔王は至極楽しげに部屋を後にした。
残された執務室で宰相は人知れずため息をつくのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5692s/>

召喚→田舎娘

2011年5月23日15時47分発行